

915.6-H38ウ
1200500758541

915.6
38
㊦

Ⓜ

〇
複写

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

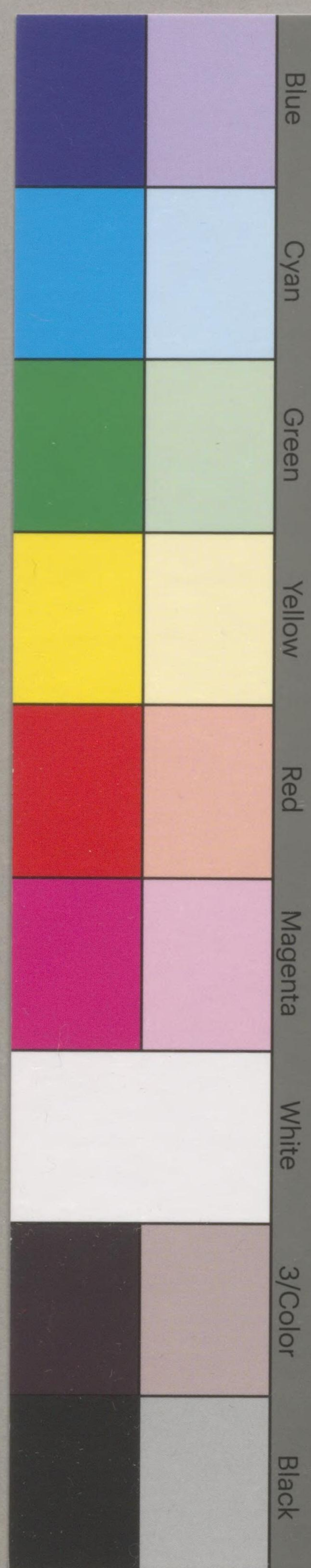


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19



KODAK Color Control Patches

© 2001 Kodak. All rights reserved. TM: Kodak. KP1200218



26.12.7.

2 2182

6

915.6
H38

巴里繪日記

橋本鞆助著

博愛館藏版

明治
45. 7. 25
丙寅

此書を亡兄の墓前に捧ぐ

巴里繪日記の序

此書は、明治四十三年四月二十七日横濱を出發して、
巴里に到り、翌年七月十五日神戸に着く迄に得たる
スケッチと、日記の一部とを合せて成つたものです。
素より、學もなく、識見もない、一畫學生の繪日記な
で、敢て大方の觀賞を得やうなどとは更に思つてゐ
ません。唯私が過去一年間、巴里にゐた紀念とする
に過ぎないのです。

明治四十五年五月二十日

森川町にて

橋 本 邦 助



巴里
二十



巴里
二十

巴里
二十



四十三車





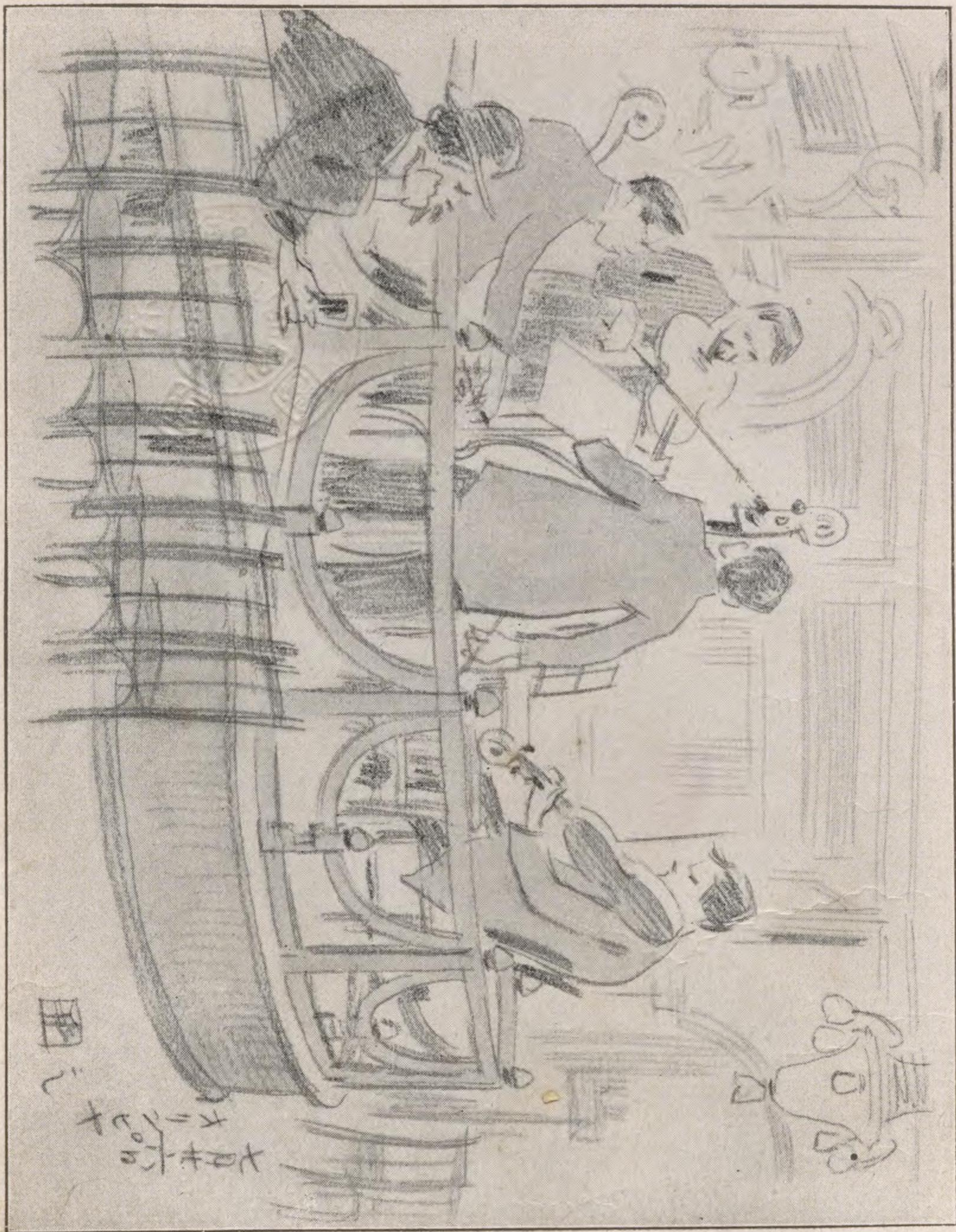


モデルの画
余の像











休みの間









黒人白人
印



时好









上流又ヤ



河ノナシ



山







六二八二八
五

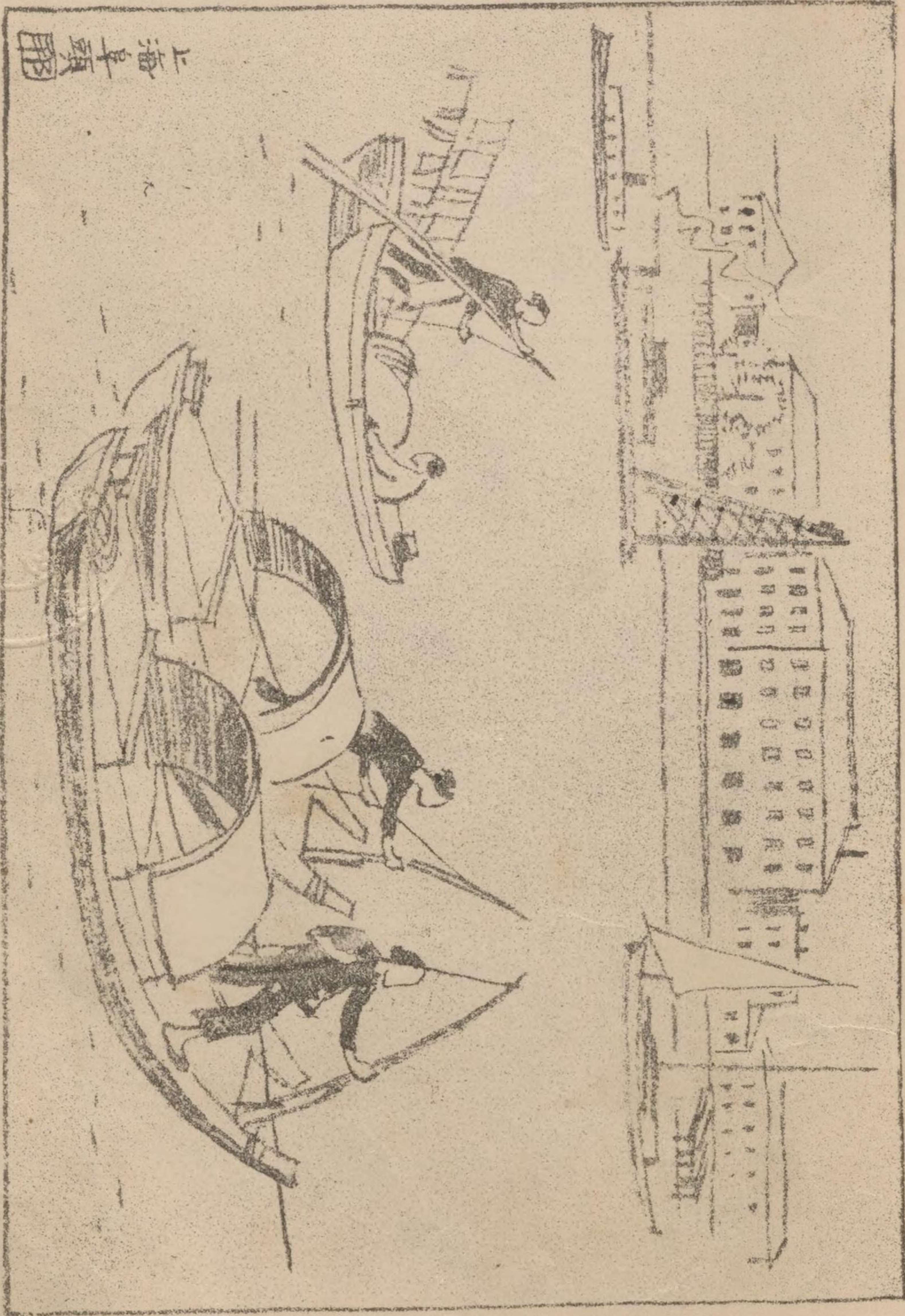






春野圖





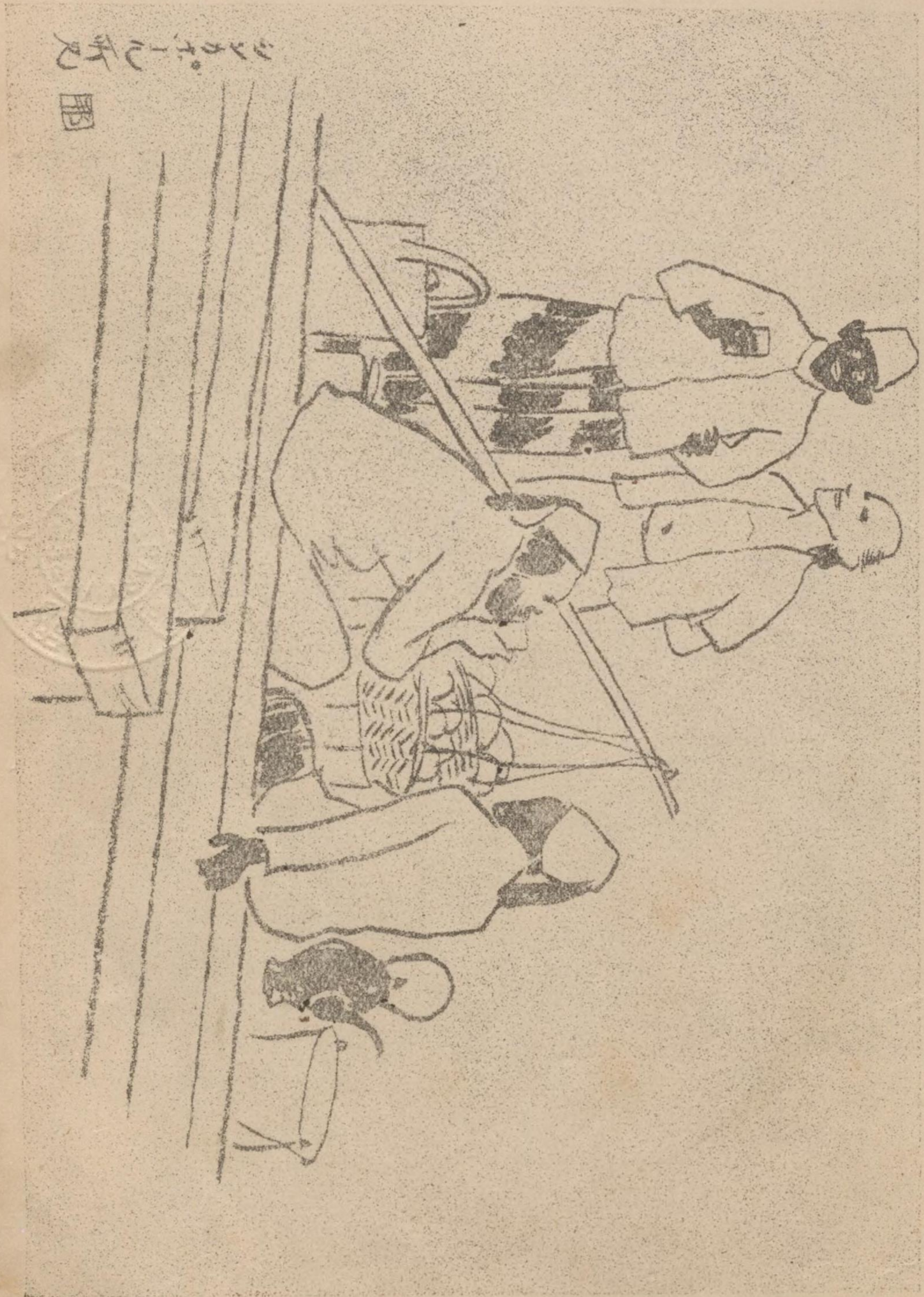
上海景圖

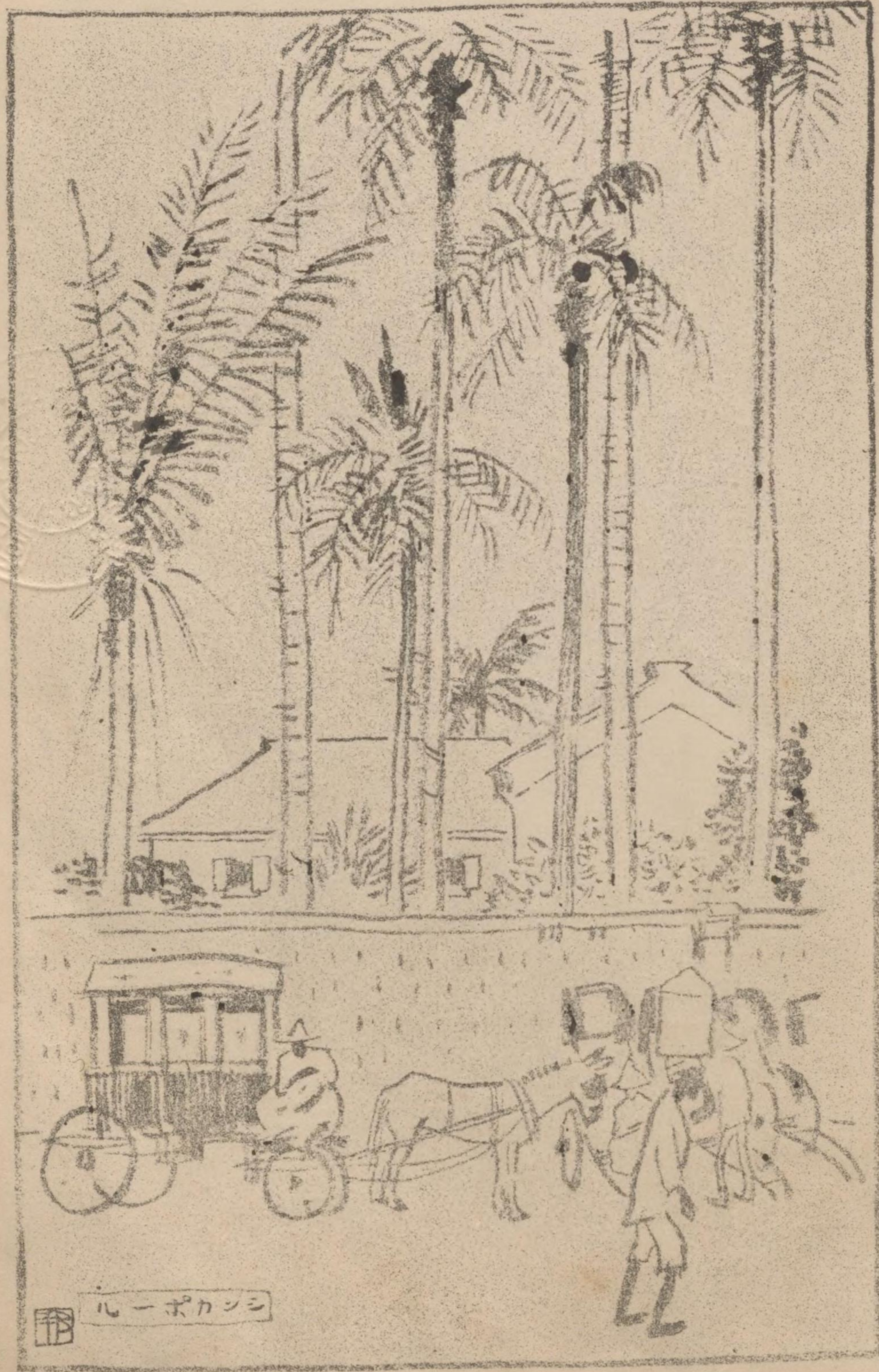




香港花市







ルーポカソ



最的印象



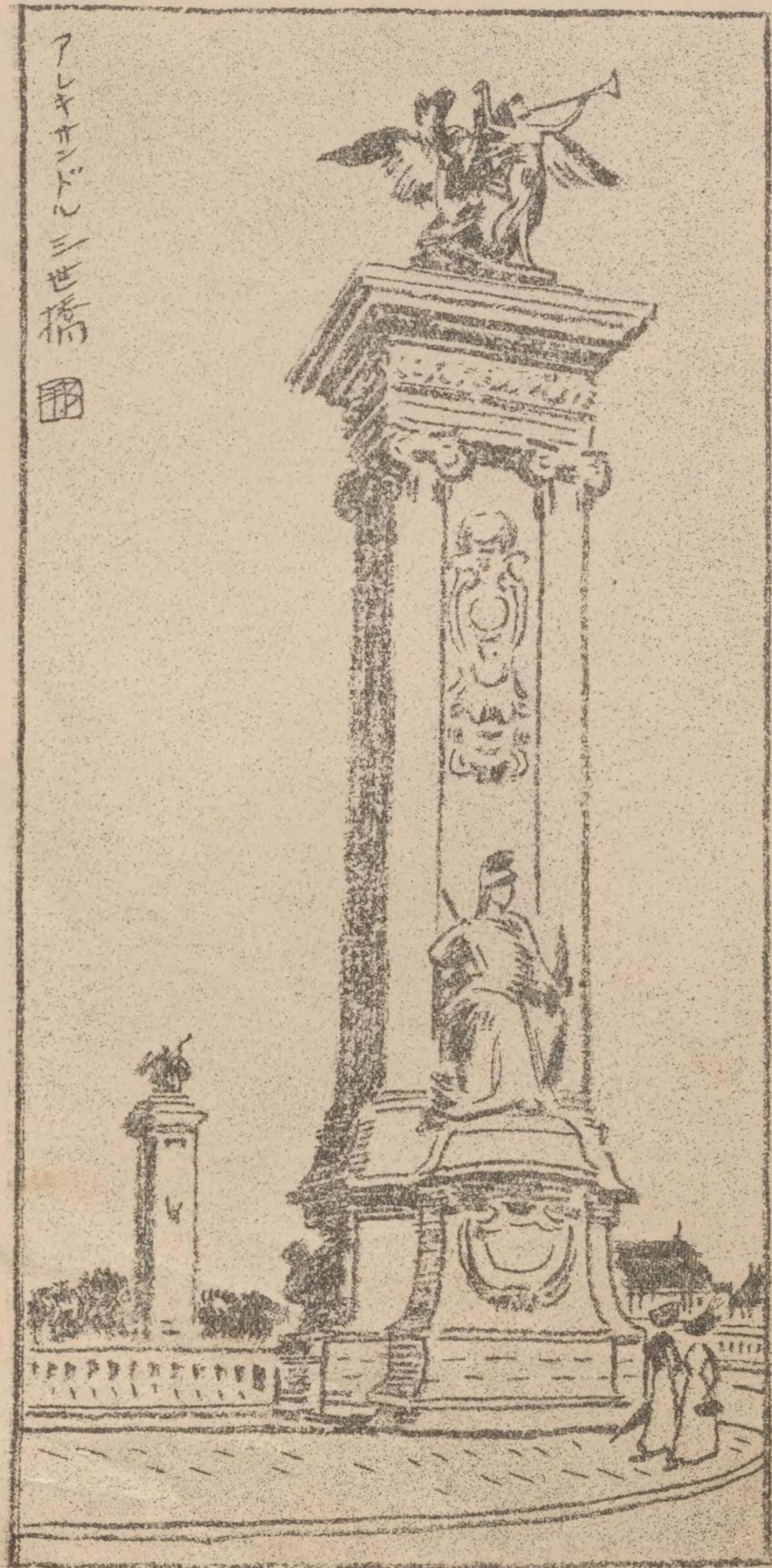
印





大道人行賣







展覧會
印







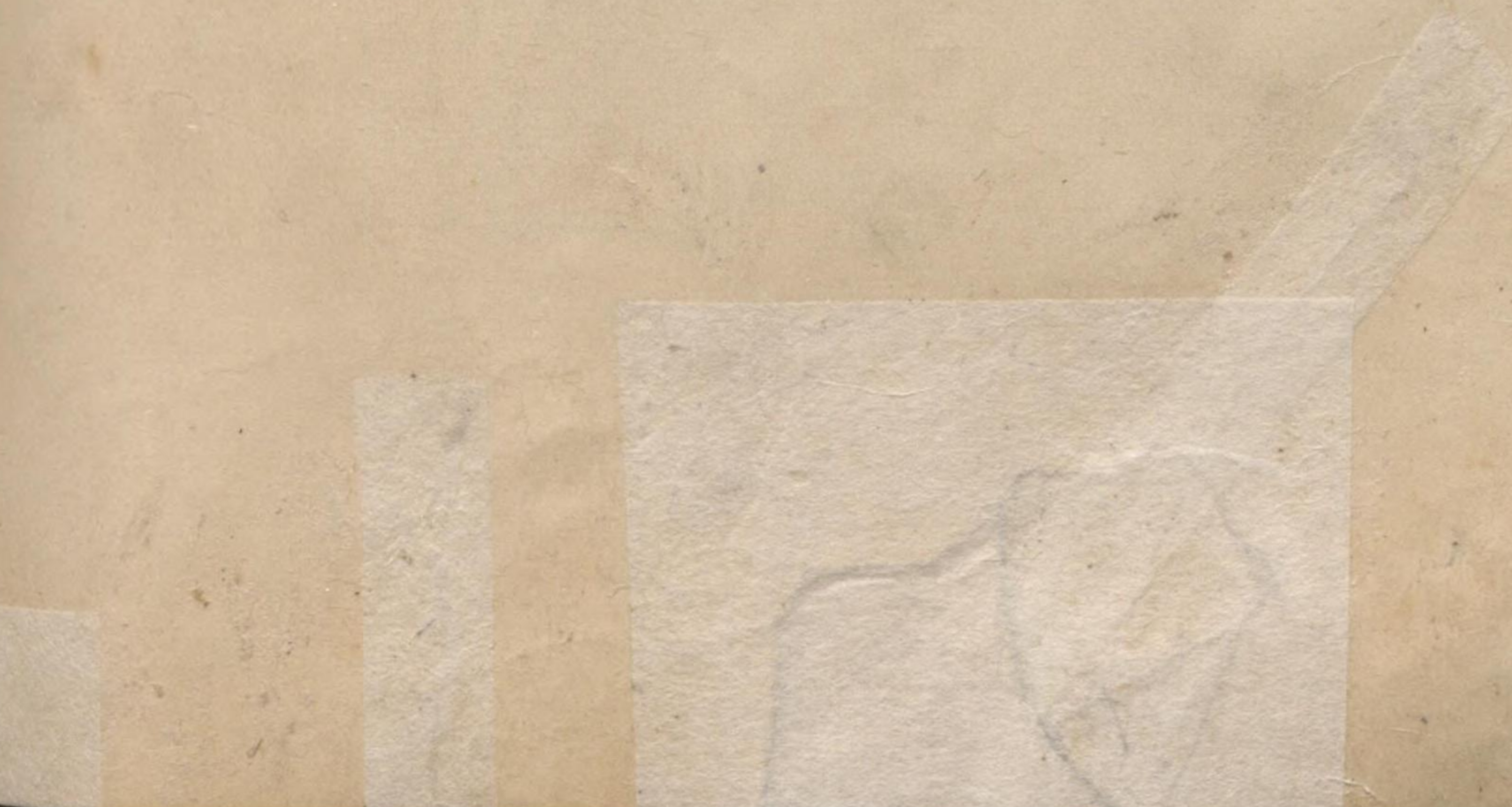
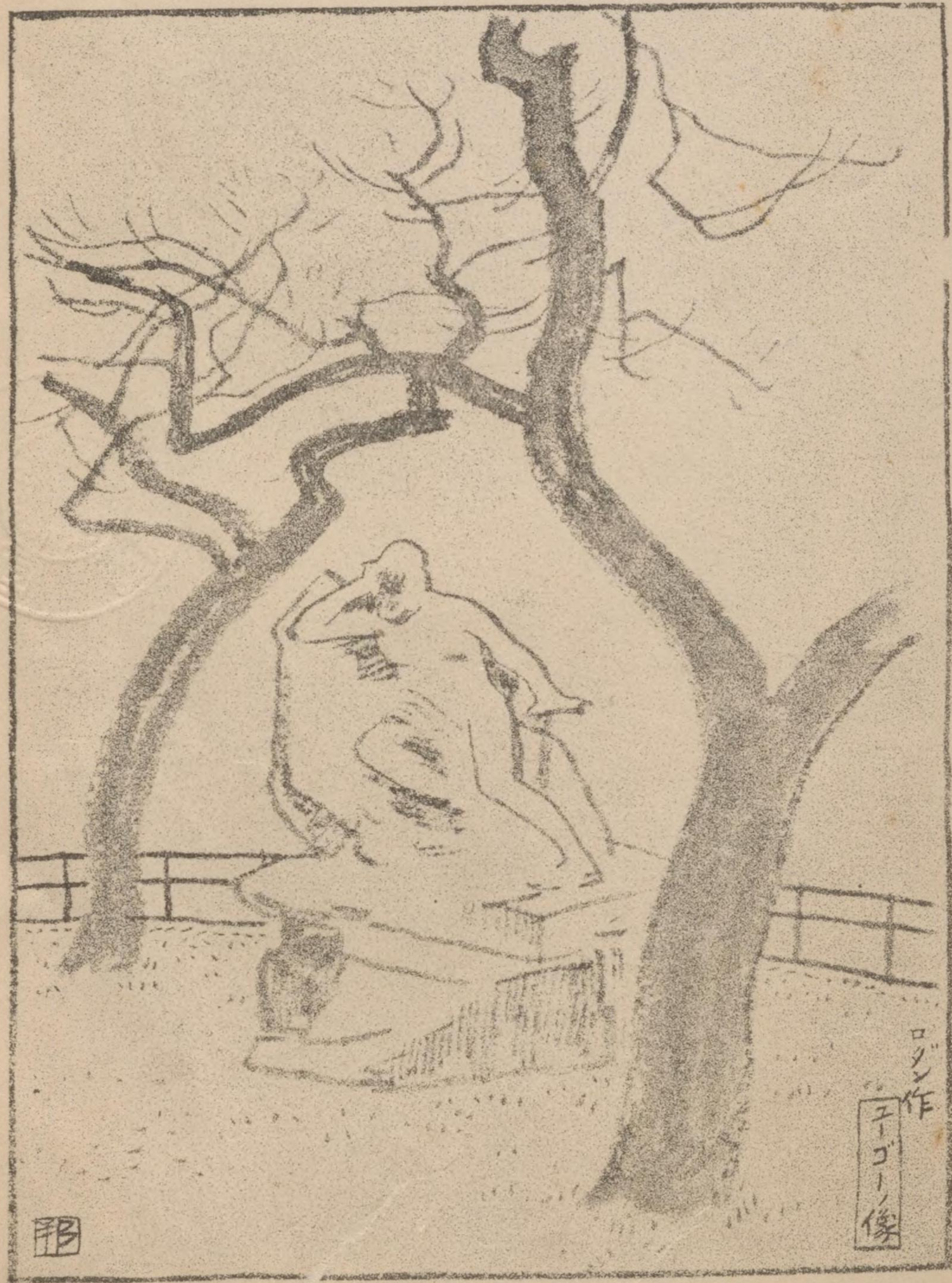


バクシン

藤村



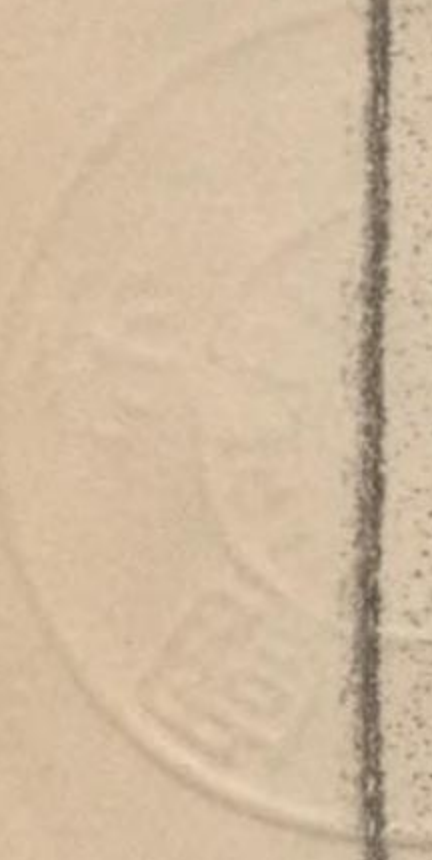








画室、了、日、

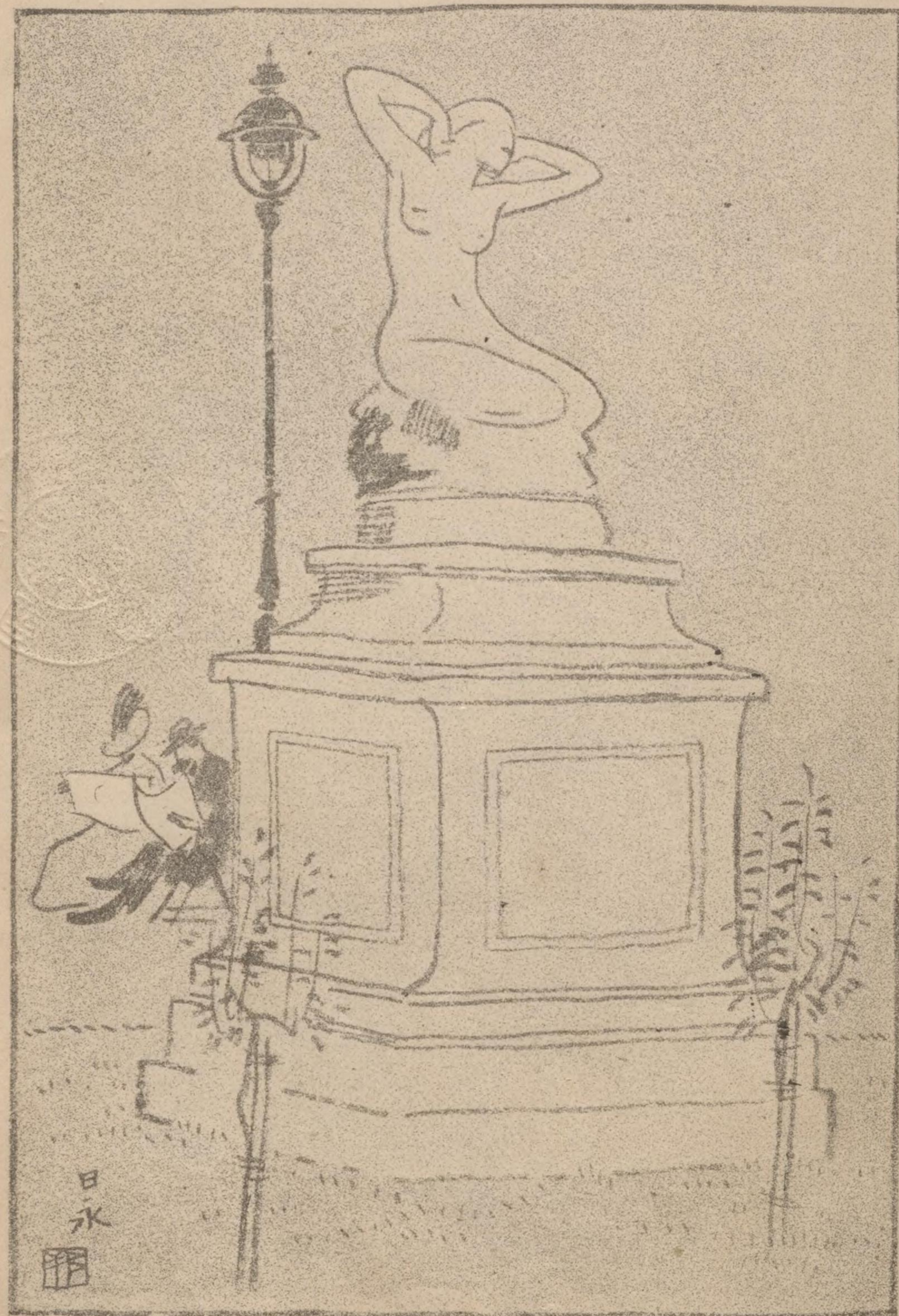






新聞費







廣告人

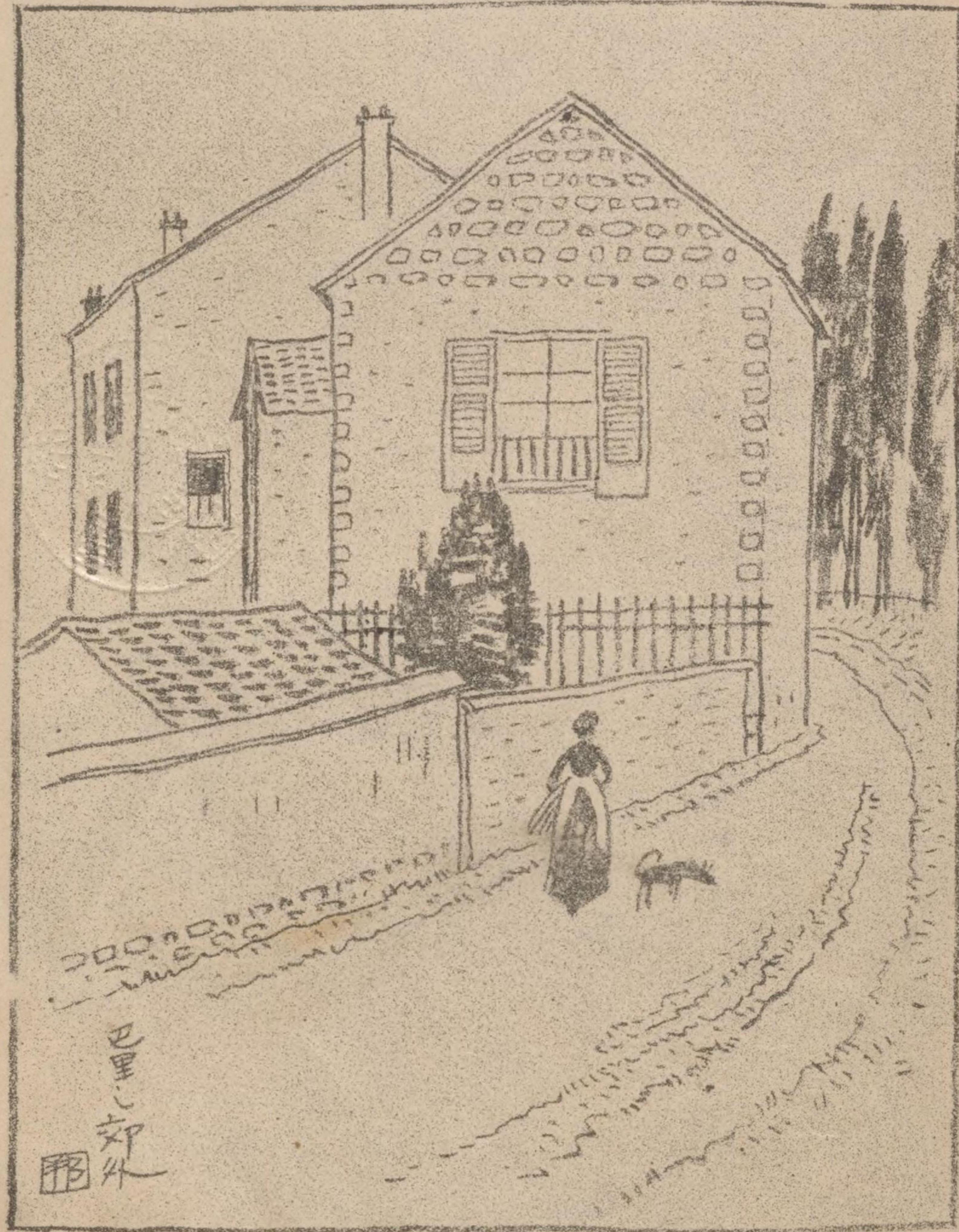






モデル







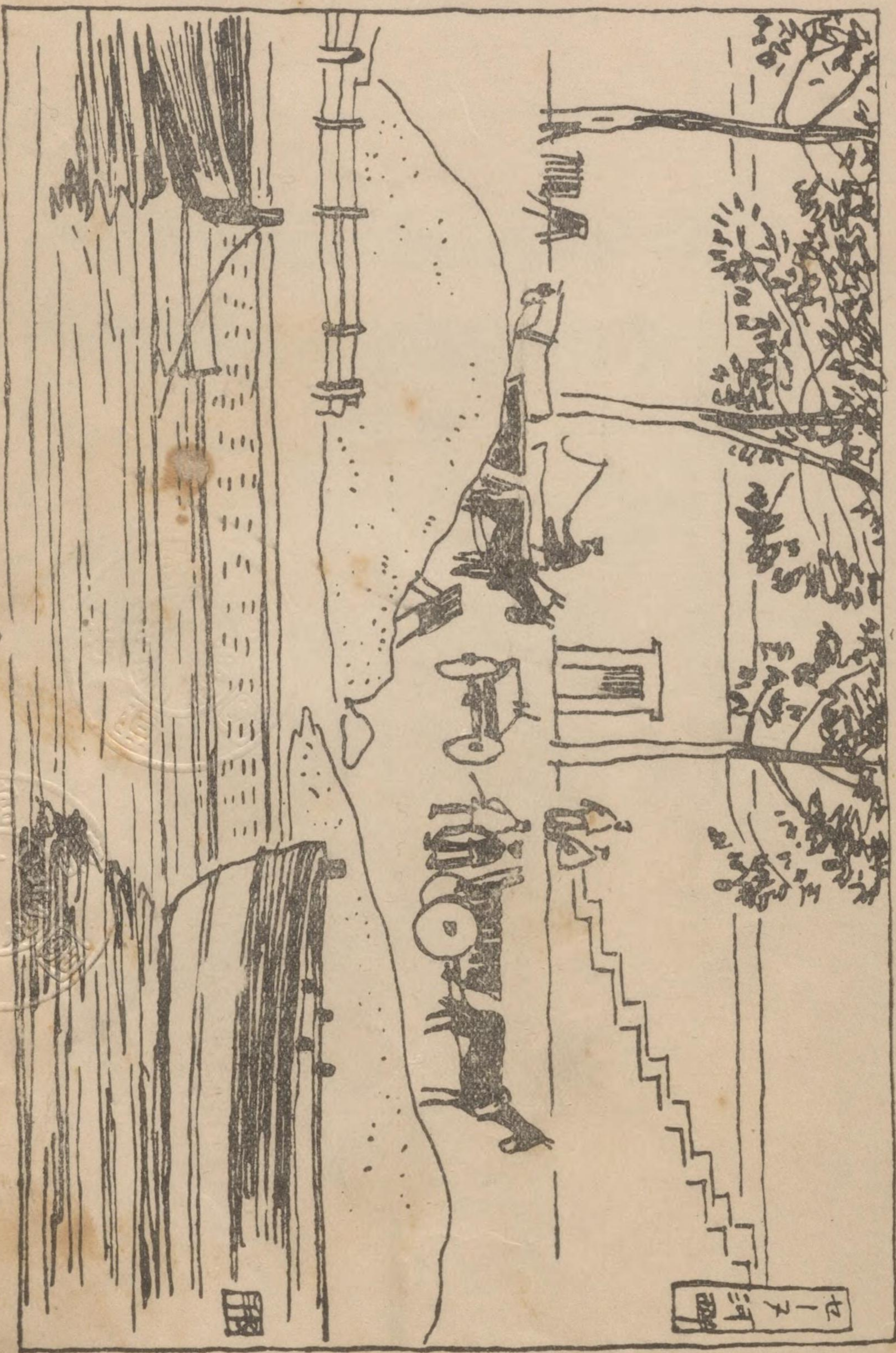




カーリー部







七一子河

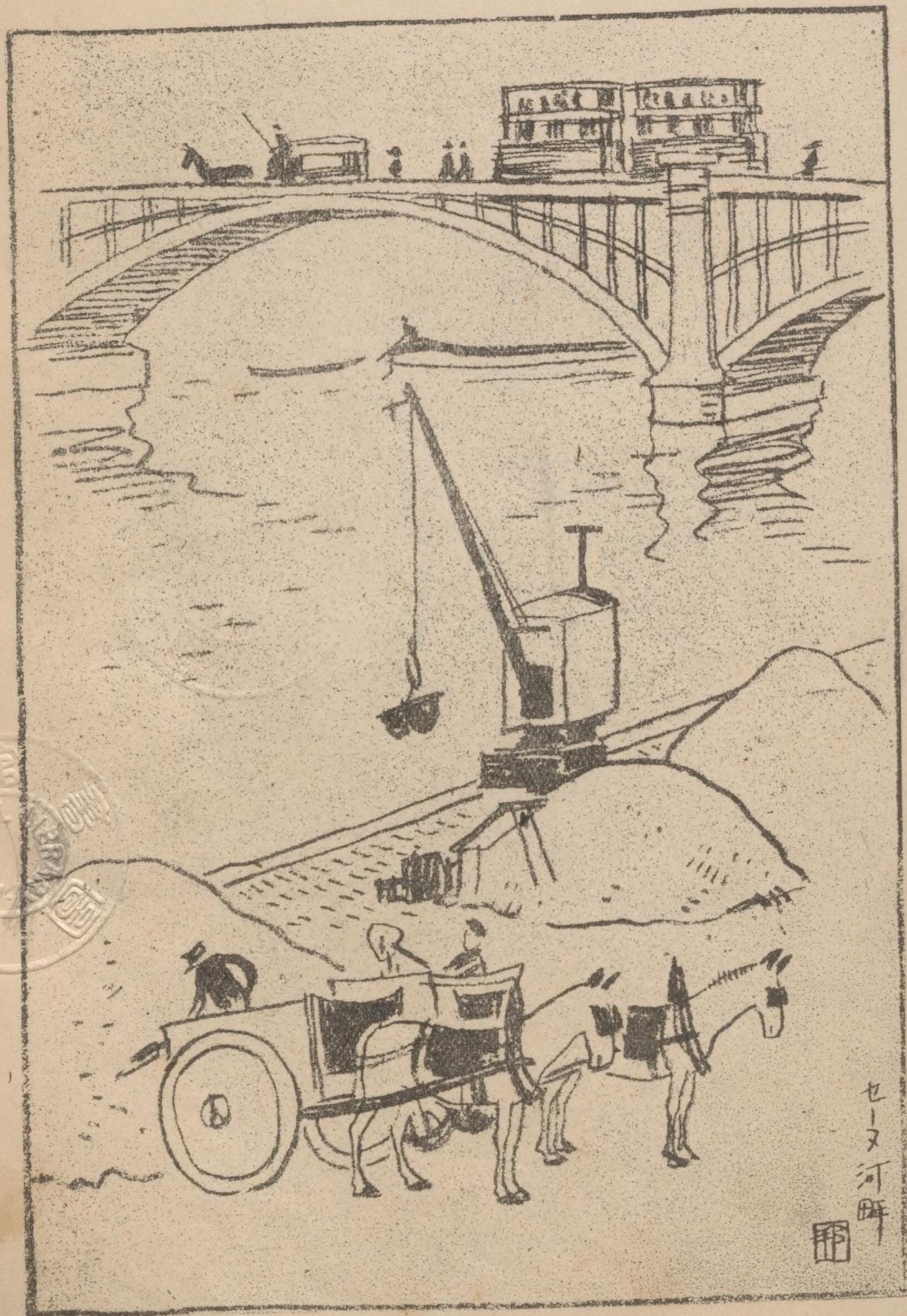
田





花市
二河





セ又河畔
印





七文河畔
印





巴里名物肥子作人





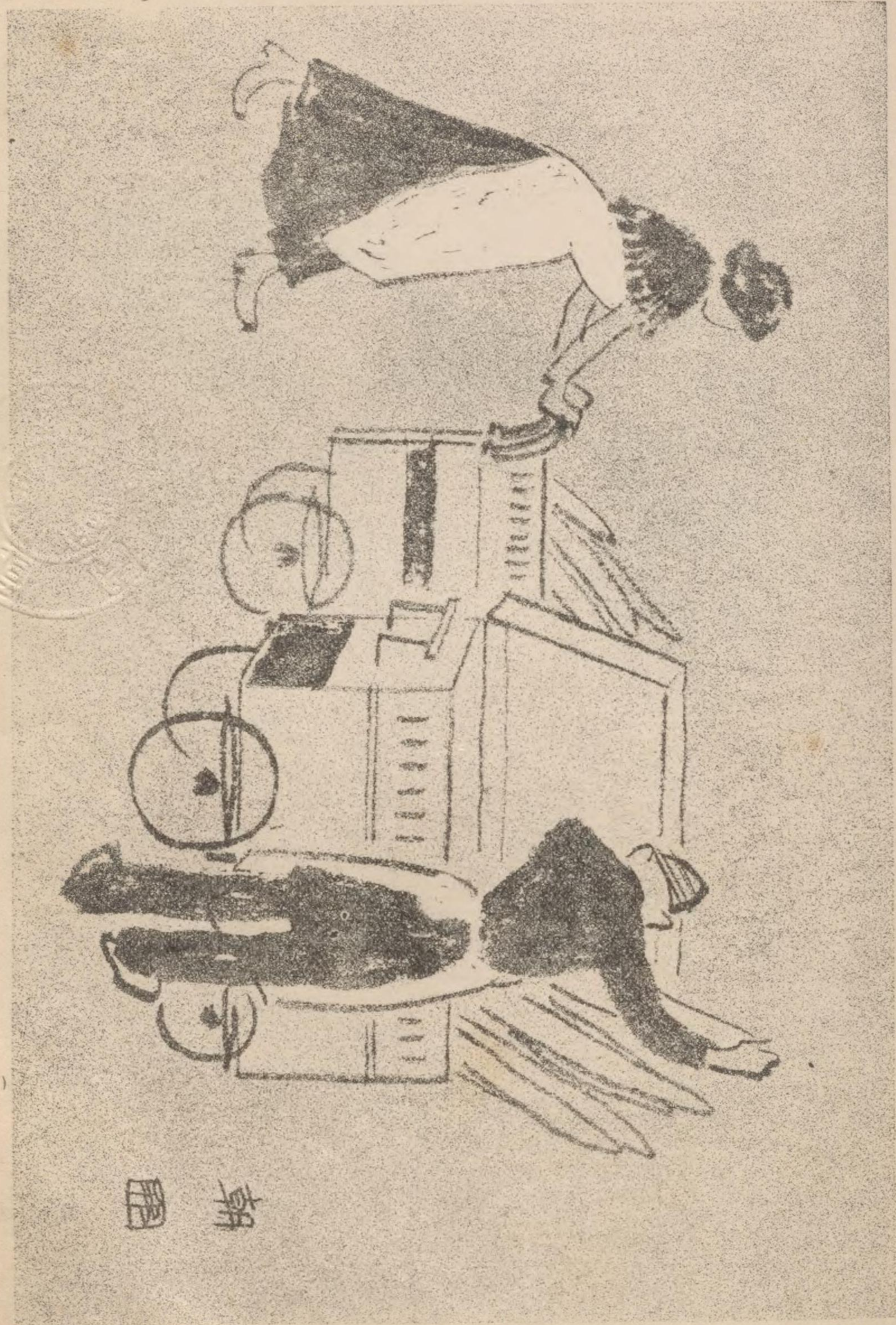






野





朝 圖





帽子



女子市圖









巴里繪日記

目次

横濱出帆	1
京へ	2
神戸出帆	3
長き航海の途に上る	4
上海着	5
香港へ	9
南へ南へ	10
ケイブルカー	11
黒人と腰巻	13



ベナン	……	二五
熱帯の涼氣	……	一七
老紳士	……	一八
静かな海	……	一九
スエズ運河	……	二一
ボートサイド所見	……	二五
鰻の御馳走	……	三〇
巴里着	……	三三
初めてサロンを見る	……	三四
巴里の寄席	……	三八
六階上の住居	……	四〇
ループル	……	四二
クロツキ	……	四六

動植物園	……	四九
五月雨の巴里	……	五一
里芋の葉	……	五三
巴里の風呂	……	五五
葬式へ	……	五六
コラン先生	……	六〇
セーヌ河の釣り	……	六五
電線電柱	……	六七
共同便所	……	六八
巴里名物	……	六九
貸書室	……	七一
書室生活	……	七四
模範的書室	……	七六

負惜み	七六
モデルの市	八一
廣告繪	八四
カツハーモニコ	八五
異色ある展覽會	八九
極單な流行	九一
巴里と那翁	九三
美術學校附近	九七
アカデミージュリアン	一〇一
小踊子	一〇五
古寫眞版	一〇九
踊子	一〇八
米國人	一〇九

如才ない女	一一一
カツヘーにて除夜	一一二
繪畫と年號	一一四
オペラ	一一六
寫生と見物人	一二〇
公園と住宅	一二五
祭りの日	一二八
活き活きしたモデル	一三四
石油とアルコールと	一三五
無言の廣告	一二七
美術學校の火事	一二八
文明と鏡	一三〇
繪畫より羊	一四二

(六)

巴里よりロンドンへ	………	一四三
巴里のモデル	………	一五二
コンコルド	………	一五四
ノートルダム	………	一五七
巴里と廣告	………	一六〇

(目次終)

巴里繪日記

橋本邦助著

四月廿七日

横濱出帆



襲つて来る。私は人々の振る半けちや帽子が見えなくなる迄船舷に立つて見てゐた。

船は大島の極く近くを通る。一昨年の冬和田と一所にそこに遊びに來たので其時知り合ひになつた人々の事を想ひ出して懐かしかつ

(一一)

た。

日没時の紅の空の中に、紫色をなした富士がすつくと立つてゐるのが雄々しい。やがて天も海も蒼ざめて来ると大島の麓に當つて、灯が一つ二つ見える。

(三)

四月廿九日



大阪の野田九浦と京都へ行く。祇園、清水のあたりいつ見ても好い。六時頃都おどりを見に行く。一等席を奮發して、美妓の立てた薄茶に舌鼓を打つ。それが濟むと舞臺が開いて、人形の様な舞妓が扇をかざし、東西の花道で向ひ合つてゆるやかに踊る。京極の賑はひを見て、大阪の野田の家へ歸り、夜遅く迄話す。

四月三十日

神戸出帆



船は午前十一時に神戸を出帆した。茲で大分乗客が増したので、船中急に賑かになつた。西洋人が子供を連れて、甲板上を運動してゐるのが如何にも輕快だ。

四十位の商人體の印度人が、三度三度私と隣つて食卓に就くことになつた。日本語が達者で色々なことを話し懸ける。

船は靜かな瀬戸内海を走るので些の動搖もなくまるで疊の上にある様だ。のんびりした形の大小の島が、いくつもいくつも見え隠れして、一大盆石を見る様に思はれる。

(三)

長き航海
の途に上
る



五月一日

朝食後、食堂で新聞の挿畫二葉大急ぎで書く。巴里の友人への土産もの、つもりでギスヶ養を澤山買ひ込む。

此の附近の壇之浦は源平の古戰場、當年赤い旗と白い旗とが青い静かな此の海で入り亂れて戦つた状は、奇觀此上もなかつたことだらうなど思ふて、平家蟹の繪葉書を東京の友に送る。十二時に船は愈々下の關を離れて、長き航海の途に上る。

(四)

上海着



五月四日

目が醒めて窓から外を見ると、海は一帶に黄土色をなしてゐる。船は今揚子江に這入つてるのである。門司より二晝夜も風強く浪高く、船暈に悩まされたる乗客も、波隠かなる河口を進むのと、上海に近づきつゝある喜びとで、皆元氣づいて來た。昨日の食堂は甚だ寂しかったが今朝はうつて變つて賑やかで飯もうまかつた。斜に綱を通し、横に竹を渡した、黒赫色の帆をあげた舟が、時々私等の船とすれすれに通る。

右手に三角州が見えて來た。左には遙かに揚子江の岸が見える。甲板上に並み居る人の顔は精彩を帯び、望遠鏡は手から手に渡される。三角州を過ぎてより、揚子江の口は急に狭くなつた。草の緑り楊柳の茂り、其間に點々してゐる白い家、赤い屋根もはつきり見えて來た。帆を

(五)

張つた黒い船がいくらも通る。

吳松港の傍を過ぎた頃は丁度晝飯時分だつた。

船が上海に碇を下したのは二時半頃で、人々は上陸すべく争つてラン
チに飛び移つた——船は揚子江の真中にゐるので——私等六人の伴れは
案内者もなく唯ふらふら出掛けた。そして愚園へ往つて見やうと云
ふことになつて、電車に乗つた。が此の電車が愚園へ往くか往かぬか
は、初めから知らないで、それを聞く爲めにN氏が英語で車掌に尋ね
たが通じないで愚園と云ふ字を書いて見せたら頷いたので、やつと腰
を下した。切符を買ふ段になつて亦困つた。が今度は手真似で濟ま
せた。電車は海岸通りより左にそれて、雑踏すること上海第一と云は
る、南京街を通る。

道は中央が車道兩側が人道と別たれてある工合は、銀座あたりと少し
も違はぬ。が赤い漆や金で塗つた佛壇の様な家の多いのには奇異な



上海の町

思ひをした。軒先きに看板を多く
掛け連ねてあるのも茲の特色の一
つであらう。四つ辻には英租界で
備つてる赤い布で頭を巻いた偉大
な印度巡查が立つて、手を揚げた
り下げたりして、頻繁な車馬の通行
を指揮してゐる。
南京街の盡きんとする所に、歐米人
の經營してゐる競馬場がある。今日
は丁度其競馬のある日として、其附近
は非常な人出である。電車の内か
ら競馬場がよく見渡される。今し
も驅けり來る數頭の馬は、電車のす

ぐ近くを過ぎむとするので、我等は車内より大聲あげて聲援した。
 愚園は、公園と云ふよりは一の庭園である。門を入ると右側に入場料
 を拂ふ所がある。更に門を入つて右すれば、すぐ池に臨む。廻廊に出
 る。池の汀は支那特有の、所々に丸い穴のある石で透間もなく飾られ
 てあつて、楊柳や芭蕉が其間に配せられ、新緑の香が漂つてゐる。古雅
 な欄干の廻れる白壁の一の樓臺が、池中に浮むでゐる。樓は所々に窓
 が明けられては、あるが、内部は甚だ暗い。床は瓦で種々の模様が見
 されてゐる。其一段高い所に三人の樂師がゐて、沈むだ樂を奏してゐ
 る。其前に澤山の椅子やテーブルが置かれてあつて、人々はそこで静
 かに、樂を聞き茶を喫してゐるのである。我等はそこに向ひ側の茶館
 に休むだ。

梧桐や、芭蕉や、楊柳や、水竹をあしらつた南畫の謝亭、岩に倚り、水に臨む
 だ北宗畫の樓臺、繪を見る毎に幾度か憧憬れてゐた其樓の内に、私は今
 現に、黒檀の椅子に腰を下して、同じテーブルの上の支那料理を喫し、支
 那茶をすゝつてゐる。私は畫中の人となつてゐるのである。向ひより
 來る樂の音は、新緑の香と共にこゝろよい。耳に飾りの環をつけ、目の
 邊を淡紅に染めた乙女が、黄や、紫の衣を着て、二人、三人、我等の室を覗き
 ながら通る。私は何だか現代を離れて、遠い遠い時代に生きてゐる様な
 氣になつた。

五月六日

香港へ



午前八時半船は拔錨して香港に向ふ。
 上海を出て數十哩の間尙ほ黄波滔々として、轉た揚
 子江の大を思はざるを得ない。

夕方になつて島影左右に現はる。

南へ南へ



五月七日

本日より暑氣俄かに加はる。上海より船は一直線に南へ南へと進みて、熱帯圏へ入つたからであらう。

甲版にタオルや、ナフキンや、ズボン下の洗濯物が干され、それに日光が直射して目まぐるしい。

夜、今迄同じ卓で飯を食つてた支那人が、明日香港で下りると云ふので、其送別會を食堂で開いた。白人が時々ビールやらウエスキーを飲みに来るが、こそこそ行つてしまふ、黄色人同士の會飲に遠慮してゐるのであらう。

五月九日

香港へ着いた。

ケーブルカー



茲を過ぎる旅行者の多くが、一度は必ず乗つて見ると云ふケーブルカーへ、自分も乗

つて見た。

停車場より少しの平地もなく、車はすぐに坂を登る。

日本にては、七八月頃でなければ見られぬ朝顔の様な花が道端に晝日中咲いてたり、椰子の木がすつくと立つてたり、棕櫚が一面に生ひ茂つてたりするので、自分は今、熱帯に居るのだと云ふことを、しみじみ感ずる。

車は時々、藪や、暗い木の茂りの間を抜けて、明るい崖に添ふて走る。すると車掌は、僅かではあるが車の進行を止める。其間乗客は展望を恣にする事が出来るのである。



香港の港

(三)
濃き緑色の山の麓に、種々な色彩をなせる香港の市街が白日に照らされて、きら／＼光つてるのが目の下に見える。對岸の支那大陸が青疊を展べた様な静かな灣の向ふに、近く横はつてる。灣の内には無数の舟が、唯もう雑然としてちらばつてゐる。長さ七十間もある汽船が豆ツぶ位にしか見えない。それが煙を吐いてゐるなどは甚だ滑稽である。
車が、最も急坂を登るときには、

體は殆ど横になつてゐるので、自分の前に腰掛けてゐる西洋婦人の、大きな帽子が、今にも自分の顔に落ちて來そうだ。いや落ちて來ると云へば、若しも車を支へてる鐵條が、何かの故障で切れたらどうなるだらう。シガーをふかしてゐる鼻の高い男も、白い服を着て、赤い洋傘を持つた女も、油臭き辮髪の人も、車と共に千尋の崖下に落ちて、微塵に打ち碎かれるであらう。そう思ふとぞつととして冷汗が出る。

五月十六日

黒人と腰巻と



シンガポールへ來て、珍らしく目につくもの、一ツは黒人の腰巻である。目だけ白く光つてゐるあの眞黒な體に種々な布を巻き付けて街を往來してゐる様が實に奇觀だ。日本の下女の御さがりを頂戴して來たのかと思はるゝ様な、色の褪た



園公のルーボガンシ

赤い布を纏て得意がつてるのもある。

鉢巻も白腰巻も白のやつは、それが特に目に立って、洗濯屋の廣告か看板には持てこいであると思はれる。或は青い縦縞のもの、或は赤の粗い格子縞のもの、或は單に黄なるもの、或は草花や鳥獸の模様のあるもの、或は細かな唐草模様のあるもの、それら百人百色の布を纏つたものが、づらりと棧橋の欄干に凭たれてゐるのを、ランチの上

(115)

から見上ぐると、そこに腰巻陳列會が催はされたかの様だ。

メナン



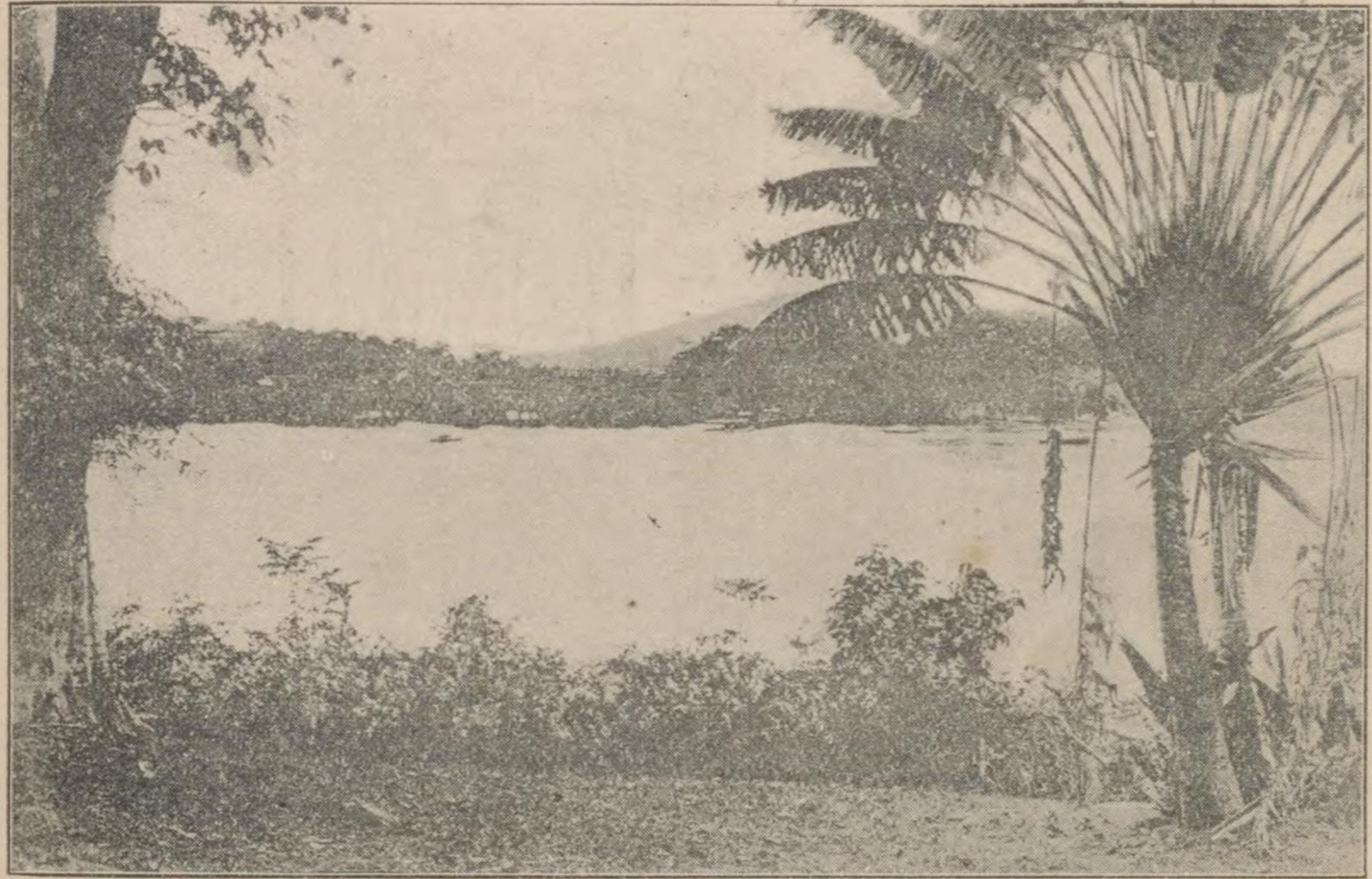
五月二十日
彼南に着いた今夜は甚だ静かな夜である。空は曇つてはゐるが、月があるので、海も空も銀鼠色をなして薄明い。

船の周圍に二挺艦を操つてサンバン、サンバンと異様な聲で、黒人が呼ばつてゐる。

私は甲板へ出て静かな海に對しながら色々なことを考へてゐた。と、浴衣を着た二人の女と白服姿の水夫とを載せたサンバンが、船梯子の下を離れて夢の様な左舷より、彼南の町の灯が華やかにともつてる、右舷の方へ廻つて行くのを見た。

今日茲へ伊豫丸の着くのを知つて、二人の女は、各馴染の水夫を迎ひ

(115)



(一六)

に来て、香料の香高き自分の室
で積る話に一夜を過ごそうと
するのである。

降つても照つても空と海とよ
りしか目に入らない船の中で
眞黒になつて同じ様な仕事を
日に日に續けてゆく水夫と、甘
言に誑されて、千里の外に密航
して來て、心にもなき醜業に身
を墜して、憐れな女とを載せ
た舟が、町の灯の華やかにとも
つてる方へと、すすん進むで
行く。

今宵は水夫長の小言より逃れて、優しき言葉、情ある話に、心も柔らぐこ
とであらう。白人と黒人と、支那人とを相手に、身を切る如き務めをし
て、肉も腐れ、心も荒みたる女も、故國の人、其人は無邪氣で且つ勇敢な水
夫に對つては、心から親しみ語るのを禁じ得ぬであらう。斯くて水夫
は亦、長き單調な航海にも元氣が出やうし、女は亦來む時の會瀬を楽し
みに、其日其日の苦も打ち忘るゝであらう。

さらば今宵は、彼等の上に幸あれよと、舟を見送りながら、獨り心に祚る。

六月五日

熱帯の涼
氣



朝五時半にベットを飛び出して、まだ水の乾かぬ、
洗ひ立ての甲板の上を、洗足でひたひた歩く。
海は静かだし、風は涼しいし、太陽の上るのも見ら
れて、心地すがすがしい。船は十一時半頃、紅海の狭い口を通過する。

(一七)

紅海の蒸す様な熱さには、旅人が最も閉口すると云ふことを聞ひてゐたが、一向そんな様子もないので、却つて張り合ひがない。朝から夕方迄に、本船より先きに行く汽船を三杯抜いた、非常に氣持りの好いものだ。これがあべこべに駆け抜かれてゆかれると、きつと不快なものだらうと思ふ。鷗の様な鳥が、船に伴れて飛び行く。

六月七日

老紳士



昨夜は涼しい風が室の中へ吹つ込むで来て、何とも云へぬ好い寢心地だつた。朝は早く起きて、相變らず甲板を洗足で歩く。

午後食堂で話してゐたら、英國の老紳士がやつて来て、加藤ドクトルに兒供が食事の時騒々しいがそれを止める藥

はないかと笑ひく話掛ける、此老人どことなくゆつたりしてゐて、酒を飲めば大にはしやぎ出す面白い氣質の人だ。顔の深い皺と目尻の下つた點が氣に入つたから、鉛筆で肖像を畫いてやつたら喜むでゐた。そこへやつて來た露國人が、僕に歳は十七かと聞くから廿七だと云ふたら、彼は怪訝な顔してそれにしては小さいと手真似で變なことをしてる。僕より大きい和田が、巴里で小供あつかひにされてるそうだから、僕が十七位に見られるのも無理のないことだ。

六月八日

静かな海



今日は風も弱く、海も静かだ。船は北へくと進むで行くので、氣候は涼しくなるばかりだ。

機關長の話によれば、紅海へ這入つたら蒸し熱くツて、とてもベットになぞ寝られないから、其時はみんな甲板へ寝るの

だそうだが、今度の航海はどう云ふ風の吹き廻しか、更に寝苦しい日に
一晩も遇はなかつた、僕等は實に幸福な時に出會したのを喜むでゐる。
正午頃は、太陽が丁度頭の眞上へ來てるので、影が足許へ少さく集まつ
てしまふ。だから三尺離れて歩かないでも影を踏む心配はない。
午後斬髪して貰ふ。理髪師はボーイ兼帯で、何でも早くやれ主義だか
らたまらない。二十分位で刈つた跡には虎斑が残り、剃つた鬚の跡は
ざら／＼する。頭を洗ひもしなければ、油や香水など無論振り掛ける
ことはしない。それで一回の理髪料五十錢とは、中々好い實入りであ
る。

今日も甲板に夏服だの、シャツだの、ズボン下だの、浴衣だの、半ケチだの、
靴下だの、洗濯物が一面に干し列べてある。膚に付けられてない時の
皺の寄つた着物はきたならしいものだ。
夕食後甲板に出た時には、丁度太陽が黄な色を上方に漂はせて鼠色の

雲の中に、あか／＼と地平線近く落ち行く時であつた。
浪が少しも立たないので、まるで瀬戸内海を行く様だ。穏やかな海、眠
つてる様な海、其内を黒煙を揚げて走つて行く船の跡が、黒く長く海に
残つてる。それが如何にも大事な塗物か、何かに、傷を付ける様に思は
れて、無残である。

六月九日

スエズ運河



自分が今朝起き出た時には、船はスエズ
灣を進航しつゝあつた。

船に近く右にも左にも砂山が見える、コロンボを出てより十二日間と
云ふもの、唯海と空とばかりで、紅海の入口で一寸陸を見たが、海上
に鳥が飛むでると云つては珍らしがり、海豚が見えると云つては目を
丸くした人々には、非常に楽しく思はれた。望遠鏡を取つて見ると、黒



近 附 ズ エ ス

つばい岩と、赤黄いろい砂ばかり、草木は更にない。焼砂が日光を反射してぎら／＼光つてゐる爲めに眩しくつて長い間見えてゐられない。晝飯に食堂へ入つた時には、一時、總てのものが暗くつて、何が何だかさっぱりわからなかつた。

船がフェズへ着くと、陸から三角形の帆を張つた小舟がいくつも、いくつもやつて来る。そして帆柱から舟舷へ結び付けた繩梯子を傳はつて本船に乗

(三)

り移り種々な土産物を賣りに来る。中々高價に吹つ掛けるが半値位にはまける。けしからぬ寫眞を持つて、ちらと見せて、買はぬかと勧める。それを賣つてしまふとまた小舟から一ダース位持つて来る。彼等は決して一度に澤山持つて来ないのだ、彼等は時によると没收されるもののあるのを懸念してゐる者らしい。茲からパイロットが乗つた。愈々有名なスエズの運河に入るのだ。

運河の廣さは約四十間位ある。土手の毀れぬ様に、コンクリートで固めた處や、石を疊み上げた處もあるが、大部分は掘りつ放しの處が多い。ある處には蘆を植え付けたり、植林をしたりして土手の崩れるのを防いでゐる。元來此邊は年中殆ど雨の降らない處なのだから、植林事業は非常に困難なことなので。其困難なことを敢てして、しかも、多少にても好結果を得つゝある運河會社の努力は、實に嘆賞すべきである。此の運河を境にして右はアラビヤ、左はアフリカの沙漠が無限に連な

(三)

つてる。時々ラクダを連れた黒人が土手を通るのを見るにつけて、小學校に居る時分教はつた隊商のことを思ひ出して言ひしれず懐かしく思つた。

何しろ狭い運河のことであるから船と船が通り過ぎる時には、どちらか一方片寄り止まつて、他船の通行を待たねばならぬ。三艘も四艘も待たせて置いて、悠々として過ぎ行く時には何だかこう殿様にでもなつた様な氣だ。自分の船が三十分も一時間も同じ處にちつと待たねばならぬ時には、錨を上げたり下したり、其度毎に車の音が「ら〜」頭に響いていやなものだ。

夜は探海燈で行く手を照しながら通る。

六月十日

ポードサイド所見



船がポードサイドに着いたと云ふのでN氏が朝早く起こしに来る。今日は晝頃に着く豫定だつたのが、昨日運河で船を待ち合せたことが、

案外に少なかつた爲めか、午前五時には早くも着いたのである。

茲へは唯單に石炭を搭載する爲めに五時間許り碇泊するのである。其石炭は英炭で粉末になつてゐるから、積み込むときにそれが四散して船が眞つ黒になつてしまふ。だから船にはとても居られたものではない、其間は是非共陸へ上らなければならぬのだ。其でなくつても陸上戀しき時だから、起る勿々上陸の支度をする。いつも八時の朝飯が今朝は六時に始まつた。船では早く客を上陸せしめて置いて、室内へ石炭粉の進入せぬ様それ〜手配をするのだ。

船から陸迄の距離が隅田川より狭いそれでサンパン料一人前六ペ

ス日本の金で約二十五錢だ。是迄の港に比して甚だ高價だ。歐羅巴へ近くなつたのだから値が高いのだらうと誰か言つた。僕等がサンパンに乗つた時分には、既に石炭の積み込みを盛んにやつてゐた。唯見る石炭船も黒く、石炭も黒く、本船も黒い。其間に働いてゐる黒人が、石炭の大きな固まりの動いてゐる様にしか思はれない。船梯子を上下してゐる態は、まるで影繪を見る様なものだ。

大阪醫學校のK氏、同じくT氏、福岡醫科大學のO氏、高等學校のN氏及び僕の五人は、どこに行くと云ふあてもなく唯ぶら／＼町を歩く。曾て聞えてゐた通り、變なアラビヤ人が幾人もやつて來て、案内しやうとうるさく付け纏ふ。それを好い加減に遠ざけると、亦他のものがやつて來て、品物を賣り付け様として、いらぬと云つても何でも、いつ迄もあとに付いて來る。あるものは例のけしからぬ寫眞を出して、連りに買はぬかと、妙な笑顏をして人の顔を覗く。繪葉書屋に寄つて葉書を

買はふとすると、茲でも面白いものを見せるから、奥へ來いと引つ張つて行こうとする。小僧が變な腰付をして、サックは入らぬかと聞く。彼等は人を何と思つてゐるのだらう、日本人は餘程興し易しとでも思つてゐるのだらうか。

此の町の目星しき處は大概石造で立派であるが、場末や裏通りになると鳥籠を重ねた様な、一寸風變りな構造ではあるが、家が傾いてたり壁が剥げてたりして、哀れな氣がする到る處の通りにカッヘーやパイがあつて、軒下や道端にテーブルが列べてある。そこへ腰かけて、朝からビールやウキスキーを飲み、煙草を燻らしながら、ぢろ／＼してゐる人が少くない。僕等もカッヘーへ寄つてビールを飲み、ペンとインキを借りて内地へ出す葉書を認める。

黒人が赤い房の下つたトルコ帽を冠つて、畫家の着る長いブルーズに似た着物を着て、焼砂の上を跣足で平氣で歩るいてゐる。黒布で覆面し



ポ ー ト サ イ ド

(元)
て、鼻柱の上に金管を下げた婦
人が、頭の上に大きな壺を載せ
て、やはり跣足で往來してゐる。
羊の一群を率れた小兒、鳥籠を
持った小娘、驢馬に乗った黒人、
白服を着た白人、それらの行き
來を眺めながら、ビールを飲み、
ペンを走らせてると、亦案内者
なるものがやつて來て、ヘチャ
ベチャ何とか彼とか言つてう
るさい。遂には主人に怒鳴り
付けられて、逃げ出したのは滑
稽だつた。

十二時近くに船に返つて來た時には最早石炭積みは終つたが、船の上
は一杯の石炭粉で一寸でも觸るゝと、黒く跡がつく。白人の小供が顔
を眞黒にして、目だけ光らせてゐる工合はまるで黒人の眞似して、遊ぶで
るとしか思はれなかつた。

船は正午に解纜した。

ポトサイドから五日目で、愈々マルセイユへ上陸するのだ。横濱を
出てより四十四日の間、一日も早くマルセイユへ着きたいと願つて居
たが船に狎れ、人に馴染むで來た、今となつては尙ほ四五日も長く、船に
居たい様に思ふ。

走 鰻の御馳



六月十一日

船は地中海に入る。

郵船會社の案内記には、地中海の條に、瀬戸内海の如く、八百の青螺碁市せるが如しと記してあるが、八百どころか一の島影も見えやしない。唯海も空も青いばかりだ。上陸が三四日の後に迫つたので、鐵道表を繰るやら、マルセーユへ着いたらホテルへ宿らうとか、税關がどうか、急に色々なことを評議する。スエズ運河を出てより、氣候は急に涼しくなつたので、甲板へ出てる人が大分少なくなつた。夕食に鰻の御馳走があつた。ポートサイドで仕入れたものだ。上海の鰻より柔かで甘かつた。

(三)

巴里着



六月十七日

午前十時三十分巴里へ着いた。

S氏が迎ひに来てゐてくれたのが、何よりうれしかつた。早速馬車を傭つて。ホテルスフロアへ往つた。落ち付いた親切そうな女主人が出て来て、色々世話してくれる。自分等は一先づ應接室で疲れた體を休める。室には和田先生の書いた女主人の肖像や、日本の錦繪、富士山の寫眞、日本の扇などが掛かつてる。此家は日本人が得意だといふことを聞いて居た、それや是れやで自分も此家へ紹介されたのだから、斯く日本のものを見ると何とはなしに、まんざら知らない所へ、来た様な氣は起らぬ。昨夜マルセーユで少し、か、夕飯を取らなかつたのと、今朝汽車中で何も食はなかつたのと、空腹でたまらぬ。で、カツヘーとパンを命じて二人してすゝつた。

(三)



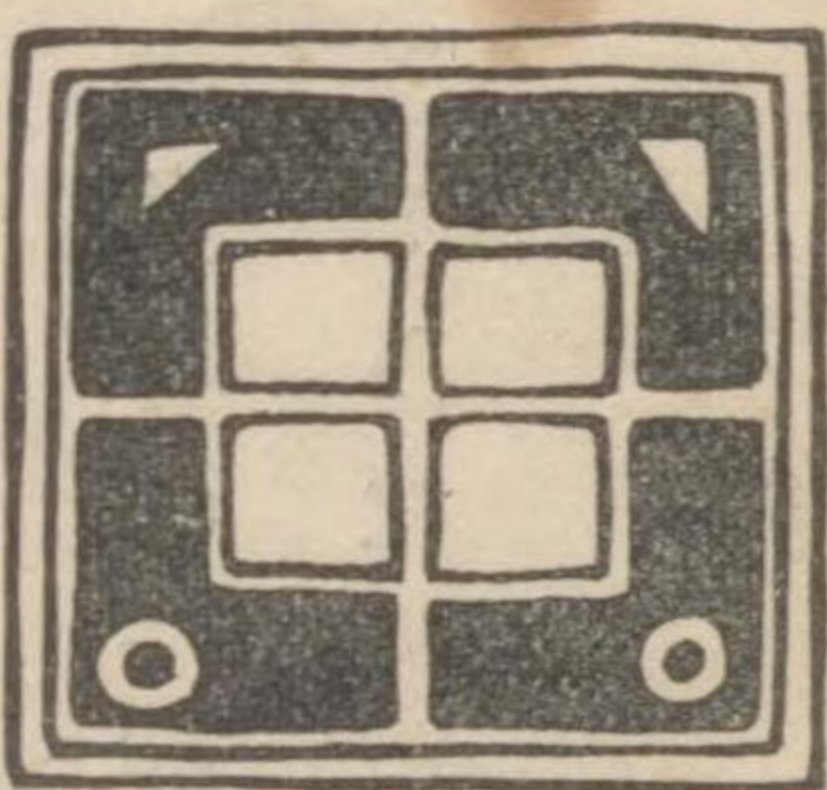
ガ、ル、ジ、リ、ヨ、ン

(三)
やがて二時になつたので、連れ
立つてSの所へ往つた。Sの居
る家は古寺の一間で部屋は廣
く、天井は高く、窓は三つもつ
てるから至つて明るい繪を畫
くには、好いとSは言つてる。
Sの畫いた、長い靴下だけを穿
いた女が、寢臺の上にひつくり
返りてる繪や、肖像や、草花や、風
景の繪が、古びた白い壁に掛け
られてある。Sが、稽古繪を五
六枚部屋の隅から引き出して
來て見せてくれた。例に依て

達者なものだ。夕飯にはまだ早いが、飯を炊かうと云ふので、肉と野菜
を買つて來た。所へさつきスフローで一寸遇たH氏(彫刻家農商務省
練習生)がやつて來る。次で先達て歸朝したI氏の好きだつたといふ
女が來る。自分は日本を出る時、I氏から托せられた品物を、其女に渡
した。女はもつと好いものを、送つて貰ふ筈だつたがと云はぬばかり
の顔をして、其品物をいぢつてる。此の女はIからの贈り物を受取り
に、昨日もSの處へ來たのださうだ。女と行き違ひにR氏(京都出身洋
畫家)が來る。四人して野菜を洗つたり、肉を切つたりして飯を炊いて
食つた

日本の畫界の話、巴里の話などで興が湧いて、歸る時分には十二時を少
し過ぎてゐた。

初めてサ
ロンを見
る



六月十九日

(三)

朝カツヘーを飲みに行つて、ルクサンプルを散歩して歸つて來るとすぐ晝だ。約束で、Sの處へ往つて炊き立ての飯に味噌汁をすふ。巴里で味噌汁とは第一の御馳走である。Sは日本にゐては、炊事などにはどんなことがあつても、手出しなどする男ではないが、生來洋食が嫌いな爲め自炊生活を餘儀なくせらるゝ結果此頃では、飯の炊き方、魚の煮方、中々手に入つたものだけだ。飯がすむだ時分丁度、N氏が來たので、一所にサロンを見に行く。サロンの會場に這入ると、先づ規模の大きいのに驚かされる。兩國に建てられた國技館が大きいと云ふが、それ以上の二階建て、天上は總ガラス張りだから隅から隅迄、暗い所がない。階下は重に彫刻を以て充たされてる數百の白い石膏像の間間には、翠

滴たる様な盆栽を以て彩どられてゐる。

階上は繪畫で、數千點の繪が殆ど隙間もなく陳列されてある。自分によくも斯く集まつたものだと思つた。更に審査によつてはねられた繪が其十數倍もあると聞いては、出品點數の多いのにあきれるばかりである。陳列品の多い如く、亦種々雜多の流派がある。暗い繪、明るい繪、細かい繪、荒い繪、濛い繪、氣取つた繪、小供らしい繪、繪具を其儘カンパスへなすり付けた様な生々しいしかし強烈な色彩の繪もある。先人の遺法を墨守してゐる人もあれば、飛び放れて新らしがつてゐる人、悪く言へば玉乗の看板見た様なものもある。小さいのは八號位から、大きいのは三四間位のものもある。

今日は日曜の爲めか、入場者が非常に多い。婦人が盛裝を凝らして、長い裾を引きすつてるのが目に立つ。入場する時裾を踏むなど、Sから注意されてるのだが、何分込み合つてるので踏みそうではらくする。

(三)

數多き繪を見て行く内に、自分等は非常に疲れた。で早く會場を出た
いと思つた。しかしわざ／＼來たのだからと云ふので、同じ建物の中
にある新サロンに這入つた。

(三)



刻彫の上屋ンロサ

茲は受賞の沙汰がなくつて、世間の人氣が薄い爲めか、或は他に理由があつてか知らぬが、入場者が至つて少ない。自分等が繪を見

る爲めには甚だ好都合だ。繪も少ないし、陳列もゆるやかに、壁の色も
澁いくすんだ緑色だから、自分等の疲れた目には快よく感じた。當て
込みの繪の少ないのも氣持ちが好い。シモン、コツテ、シャバなどの繪
が出てゐる。自分等は設けの椅子に腰掛けて話した。
新サロンが觀賞に適する様な陳列の方法を取つてゐるに反して、元のサ
ロンが、何でも御座れで雜駁な陳列法は、まるで御祭り騒ぎの様に思は
れてならぬ。
會場の出口には、ロダンの作大理石胸像二點が、特に優遇されて陳列さ
れてあつた。

(四)

巴里の寄席



六月二十三日

(元)

近所のレストーランで晝飯を済ませて、ルクサンブルを散歩していると、人がちろちろと自分の方を見てゐる。通りすがりの小僧迄後振り返つて見る。いやなものだ。

夜、Sとムーランルージュの寄席へ行く。室

内に設けられたるカツヘーの側を通つて、つき當りの散歩場で自分等は見てゐる。

外題も、歌ふ文句も、自分には頓とわからぬ。わからぬけれど見てゐて唯面白い。

さすがに藝術の發達した所として、背景の甘いには感服する。背景の多くは舞臺の人を害さぬ程度に弱くしてあるから、踊り子の動作が一一々明瞭に浮び出てくる。それに電氣を惜し氣もなく使用してあるの

で、背景に、踊り子の影が印する様な、へまなことがない。

踊り子が薄い着物一つで舞臺へ現はれ、椅子に腰掛けながら、歌唄ひながら、長い靴下を穿く様な、際どい所を見せる様なこともあるが、観客も平氣で觀てゐれば、踊り子も平氣で行つてゐる。

彼等が舞臺上の色彩の調和に苦心してゐることは、誰にでもすぐ看取される。譬へば、十數人の踊り子がオレンジ色の着物、同じ鶯色の髪の毛の中に、一人眞黒な髪の毛のものを交へたり、やゝ暫くして三人ばかり濃い御納戸色の着物を着たものを出して、舞臺を右に、左に歩ませたりする、自分等は唯其美しくしさに、酔はさるゝばかりである。こう云ふ場所に入入してゐるのだから、巴里の女の裝飾に上手なものも、最もなことだと思ふ。

自分等が舞臺に見入つてると、いつの間にか、大きい帽子を冠つた、口を赤く染めた女が側へ來て、鳥の羽で自分の頬をなせる。知らん風を

(元)

してると亦帽子をつゝく自分ばかりかと思ふと、Sへもそんないたづらをして往つてしまふ。彼は人が見てゐるやうが見てゐないが平氣でやる。對手は女だ、怒るにも怒られず仕方なしに苦笑してると、近所に居る女どもがくすくす笑ふ、何だか自分等は馬鹿にされてゐる様だ。其内に幕が下りた。二人は眞先きに通へ出た。

六月二十六日

今朝より僕は六階に住むことになつた。

今迄は三階の廣い綺麗な部屋に居たのだが、月に八十法も出ては、貧乏學生にはやりきれぬので四十法の部屋に移つたのだ。

今度の部屋は八疊位の廣さで、其内に寢臺、鏡立、ストープ、洗面器具、椅子、テーブルなどあるので、日本の八疊の間に一人居るやうな、ゆるやかな

六階上の住居



わけにはゆかぬ。

窓は三尺に五尺位なので、一つしかないので、部屋の内は薄暗いので、繪を書くのには不適當である。當分繪を書かぬからそれはまあ好いが、



シガテンバ

茲に最も閉口するのは、階子の昇り降りだ。外から歸つて來て、勞れた足で階子段を一つ一つ踏みながら六階迄昇ると、がつかりしてもう何も

する元氣がなくなつてしまふ。亦外へ出掛けて、忘れものをしたとか
雨が降りそうだから洋傘を取つて来ようと思つても、遂面倒になつて
途中で降られるとは知りながら、其儘出てしまふ。

しかし、それも自分の部屋と極まると茶もカツヘーも、落ち付いて飲め
るから心はのんびりする

最初に書いて置くことを忘れたが僕の住むで居る所は、カルチーラタ
ンと云つて本郷の様な書生町の先達てゾラを國葬にするとか、しない
とか云つて騒いだ、かのバンテオンの附近に居るのだ。

六月二十六日

今日初めてルーブルへ行く。

途中で雨に遇つたので、近所のカツヘーへ飛び
込むで、雨の止む迄そこで待つて居た。巴里に

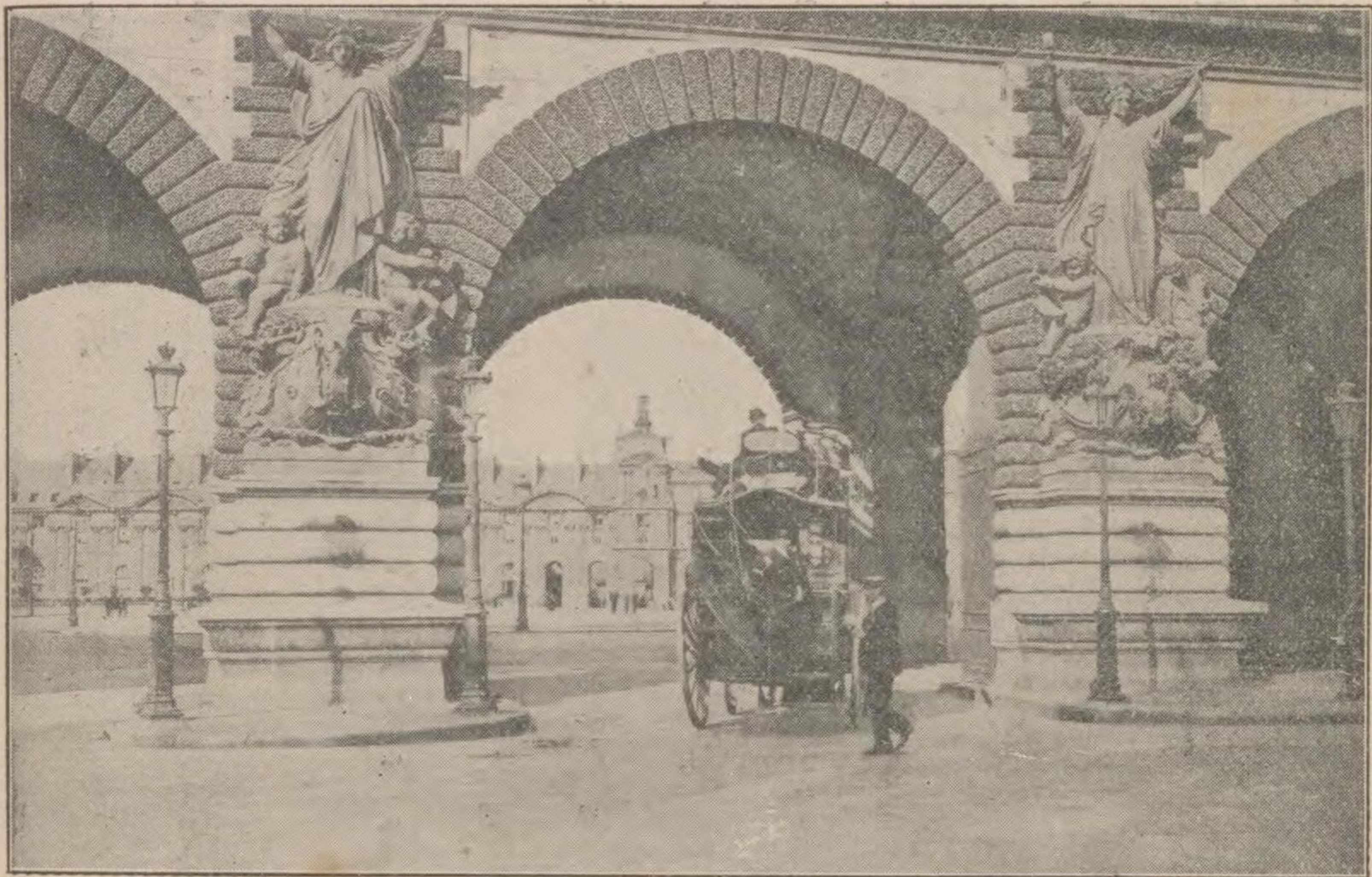
ルーブル、



は全市到る所に、カツヘーがあるから、こんな時には最も都合が好い。
そこで紙を貰つて手紙でも書ば、重寶なのだがまだそこ迄はヅウ
しくならぬ。

ルーブルへ往つて自分は直ぐ繪畫の陳列してある二階へ上つた。ど
こにどう云ふ名畫があるのか、どこが何世紀の部屋だか、更に知らずに
唯氣の向くまゝに見て歩く。その中に寫真版で見知つて居る繪が、
ちよいちよい目に付く。何かしら懐かしい様な氣がして、遂其物に見
入る。寫真で、此の繪は大きさそうだとか、小さそうだとか、思つてたの
が、案外小さかつたり大きかつたりする。殊にラフハエルの繪と、ホル
バインの繪の小さかつたのには意外な氣がした。
ダビンチ、ラフハエル、レンブラン、ヴラスケス等の繪の前には、常に人が
足を止めて見てゐる。

名畫の模寫をする人の多いことは、話に聞いて居たより以上である。



ルブールの入口

(四)
お婆さんや、お爺さんが、キャンパスに顔をくっつける位に近寄せて、細い筆でつゝついているかと思ふと、若いお嬢さんが、反り身になつて、氣取つて書いてる。模寫される繪の多くは、普通何人も知つてゐる。大概相場の定まつた代物だ。研究する爲めに模寫する人は、少なく、其過半は、賣る爲めに模寫するのだから、定評ある繪が都合が好いのだ。既に模寫が終つても、どこかしかいぢつては、亦其邊をぶらぶらしてゐる。亦書いてはす

ぐ休む。彼等は斯く同じことを繰り返してゐる内に、買手を探すのである。ルーブルの寶庫も、彼等に取りては一種の商買場所とより外思れないのだらう。
ルーブルに居ること約五時間ばかりで家に歸つた。そして何が頭に残つてゐるかと思へて見た。名畫と云はる繪が、數限りもなくあるのだ。一々それらの繪を見て居た自分の頭は、唯もうぼーつとして、どの繪がよかつたか、悪かつたか、纏まつて覺えて居らぬ。しかし、始から終迄、殆ど黒い色と、オレンジ色の間を歩いてたことを、單に記憶してゐる。

七月一日

午後五時一寸前にグランシヨールメールのク
ロツキーに往く。

近所で筆と鉛筆を買つて、畫室に這入つた。
畫室には幾人かの男女の畫學生が畫架を立
てたり、鉛筆を削つたりして、モデルが臺に上



る時間の來るのを待つてゐた。

五時の時計が鳴ると共に、モデルは裸體になつて色々な形を見せる。
自分はまだ形の極らぬ前、そのモデルがあまり瘦せて氣に喰はぬから、
そこを出てすぐ隣りにあるアカデミーコラロツシーの方へ往つた。
こゝでは既に形が極つて、モデルが後向きに立つてゐた。髪の毛の黒
い、色の白いイタリアの女で、手や足の釣り合ひが申分のない位よく整
つてゐる。自分等が終始日本で見えてゐた、頭の大きい胸の長い、足が短

かくつて太い、手首に締りのないモデルとは大分違ふ。畫かずに、唯見
てゐても氣持の好位だ。氣持の好いと云へば、茲で畫いてる畫家程
氣持の好いものはない。上野の美術學校や、其他の畫室で稽古時間に、
誰が屁を放つたとか、誰が笑つたとか云つては合槌を打つて、がやがや
騒きながら畫いてる所を經來つた自分には、茲の畫室が不思議な程靜
かなので、これで愉快に畫いてるのかと怪まれる。音のするのは唯鉛
筆の紙上を走る音と、時々鉛筆を削る音のする位のものだ。人々はモ
デルと自分の繪とを見ながら鉛筆を動かしてゐるに過ぎぬ。だからま
るで頭と手を動かしてゐる生人形の様だ。遅れて這入つて來た自分
は、椅子を動かすのに音のするのを申譯のない様に思つて冷汗が出る
位だ。

モデルは同じ形を四十分位續けて、一先づ休みたる後、亦別の形に移る
其休み時間はどこの畫室も同じことで、煙草をふかしたり、戲談を云つ

たり中々賑やかである。

クロッキーには誰でも來られる。極まつた月謝と云ふものがなく、歸り掛けに五十文を拂へばそれで好いのだ。時間は五時より七時半頃迄で、形は四度變るだから極めて短かい時間に、極めて速かに寫し取らねばならぬ。極めて速かに、其物の氣持ちを取ると云ふことは、畫家にも最も必要なことだ。人々は其稽古に來るらしい。最も中には、何かの材料にする爲めにとか、日中暇がないから夜來るといふ人もあるのは無論であらう或は線だけ研究に來ると云ふ少しは名のある畫家も、稀には見えるそうだ。

小林君の畫室が、菊坂にあつた時分には、クロッキーも度々行はれたがそれも長くは續かずに有耶無耶になつてしまつた。日本ではまだクロッキーの爲めに毎夜畫室を公開する程畫家にまだ油が乗つてゐないのだから、長く續かぬのも無理はないが、こう云ふことは月に一回と

(四六)

とか、或は二回とか、どこの畫室でも必ずやつてほしいと自分は思つた。

七月三日

動物園



SとHと來る、菓子を買つて來たから茶を入れろと云ふ。しばらくしてNも來る。室の内で話してるのもつまらなくなつたので、一所にセーヌ河畔をぶらぶらしながら動物園に往つた。

動物園は植物園をも兼ねて居るので、各種の動物は、緑の草、緑の樹の間に作られてある。大きな檻の中に別々に畜はれてある。自動車や馬車の劇しく通る街を逃れ來て、ラクダが間の抜けた首を柵の上に載せてパン切れをほゞばつてるのや、孔雀が鹿の居る柵の上へ止まつて、羽蟲をつゝいてるのを見ると、氣がのんびりして生き蘇つた様だ。

(四七)

僕等が、それからそれと見て歩いてると、そこに見てゐる外人の一團が、一様に僕等の方を振り返つて見る。僕等が汚ならしい爲めか、珍しい爲めか知らぬが、兎に角、場所がらだけに、變な動物が來たな位に思つてるのかも知らぬ。
澤山の目で注視さるゝと云ふことは或る場合には得意なものだが、或る場合には不快なものだ。

七月四日

此頃の天氣は實に不快だ。一日曇つてるか、さもなければ雨だ。雨も夕立の様に胸のすぐ程ざあつと降つてくれば、却つて氣も晴々しやうが、此頃の雨は、女がめそめそ泣く様な雨だ。たまに青い空に白い雲を見ることもあるが、それもほんの僅かの間で、すぐ曇つてしまふ。同じ

五月雨之
巴里



カ ッ ヘ ー の 前

様な天氣が毎日繰り返されるので、部屋の内が、じみじみして机掛けや夜物の物など、氣持ちの悪い程濕氣を帯びてゐる。煙草を吸はふと思つて、マッチを擦つても、マッチが濕つて、更に火が點かない。で亦新にマッチを買つて來ねばならぬ。それも日本の様にマッチが安ければ、いくら買った所で高が知れてるが、茲の様に一箇(日本)のマッチと同じ位の大きさ(四錢)も取らるゝマッチを買つて來

るそばより濕つてしまつては、甚だ閉口である。佛國ではマツチも煙草も政府の專賣だから、目の玉の飛び出る程高いのも無理はない。天氣が悪いので、夏だと云ふのに氣温は非常に下つてる。自分は今冬服を着てるのだが、それでも時々寒さを感じる位だ。日本を出る時より白い服に、赤や、紫や、緑や、黄色の洋傘を差した、巴里の女が、公園を散歩してゐる様子を頭に書いて、それを見ることを楽しみにしてゐたのだつたが、此頃の様な天氣では、その願ひは叶ひそうもない。

夕方N君来る。一所に飯を食ひに往つて来て、室で話してたが何となく寂しい、近所のカッヘーの前だけでも通つて、せめて花やかな燈火の煌きでも見て來うと、連れ立つて出て行く。

里芋之葉



七月七日

里芋がルクサンブル公園内のセナの建物に近きほとりに、丸く盛り上げた土に植ゑられ、廣き葉を風になぶらせながら、冠り振つてるのが珍らしい。

紅鮭色をなせる其莖、間の抜けた様な形の葉、風に揺れる其様の野趣ある、中々に捨て難き所



ルクサンブル公園の園

があるが。しかしそれが腐る程ある日本に於いては、あまりに見狎れてゐる爲か、誰あつても公園或は花壇に、植ゑ付け様とも思はぬ。

私は、日本の植物温室で大事に育て、る熱帯植物が、シンガポールでは、路傍に雑草と共に生ひ茂つてゐるのを見て、甲の國で珍重するもの、必ずしも乙の國で珍らしきものでないことを思つた。

此の平凡な事實が、藝術上には今堂々として幅をきかしてゐる。巴里に於いては、東洋趣味の交つたる似而非繪畫を見、日本に於いては、自ら巴里の風潮を傳へたりと自惚れてゐる出鱈目藝術を見る。あゝ何れか是なる。

七月十日

巴里の風呂



巴里へ來てから今日初て湯に行く。

しばらくの間湯に入らなかつたので垢が溜つて、手拭で擦する度に、垢がぞろぞろ落ちる、落ちるのが目に見えるので、

其度に身が少しづつ、清らかになつてゆくと思へば、まんざら悪い心持ちもしない。

湯錢は一回約三十錢位要かる。一人別々の湯槽で、熱くすることも温くすることも、自分で自由に出来るから、其點は便利だが、湯はやはり日本式に限ると自分は思ふ。

朝早く起きて、一風呂浴びて來て味噌汁で飯を喰ふとか、或は熱い湯から上つて、傘をさして細雨の中を歸る、自分にはそれが何とも云へぬ、好い心持ちだ。處が西洋流に、湯から出てすぐ、ズボンを穿いたり、靴を穿

いたり、窮窟なカラーを付けたりしては、折角好い心持ちになつたのが、何にもならなくなつてしまふ。どうしても湯は日本式に限る。外國に居る日本人の多くが、月に一回、或は年に四五回位しか湯に入らないと云ふのは、必ずしも湯銭が高からと云ばかりではないらしい。

(其)

七月十一日

葬式へ



I. M 氏の葬式に會せん爲め、ペールラシエーズへ往く。

I. M 氏は日本の或學校の彫金科を出た人で、長らく巴里に居り、近頃日本の美術品店を開いた人だ。開店早々に三百法位の収入があつて、前途益好況を呈するであらうと人が皆望みを掛けてゐたのだつた。開店してまだ一ヶ月にもならぬのに肺を病むで、しばらく病院で静養してたが、恢復の望みなく、遂に一昨九日病院で歸らぬ客となつた。

自分等は葬式の時間に少し遅れた爲め、墓地へ着いた時分には、既に歸り掛ける幾人かの同胞に出會つた。墓地の門を入ると、すぐつきあたりには、有名な彫刻、死の門がある。會てマルセーユのミュゼーで見、死の門の原型に對しては、唯技術を翫賞した、けに止まつたが、茲にある死の門に向つては、技術を離れて、つくづく死と云ふことを思はせられる。細雨が降つてゐるので、ミカゲ石の彫刻面は殊に冷やかに見える。生花や造花の花輪が飾られてある白い石の墓標や、黒い石の墓標の間を通つて、式場に到れば、式場の石段の上に知友より贈られた花輪が、雨に打たれながら、寂しく供へられてあつた。其側に立つてゐた友の、山高の黒い帽子が雨にぬれて光つてゐた。七八人の親しき友は、今焼かれつゝある遺骸の骨上を待つてゐた。自分等は其人々と共に、しばらく話してたが、骨上の終らぬ前にそこを辭した、そして再び死の門を見た。

(其)

其晚四五人の友とカッヘーで話した。T、K氏の事や、僕の巴里へ着く前日、やはり肺を病むで死むだO氏のことや、以前に同じ病に懸かつた人や、今現に肺を病むで、田舎にゐる或る學生のことや、其人々の噂が出た。

巴里で死ぬ多くの同胞が、云ひ合せた様になせ肺病で死ぬか、これには多くの原因があらう、日本にゐた時より、多少其氣のあつた人が、無論多からうと思ふが、しかし巴里で特發した人も無論ある、其原因は何だらう。

巴里に来る人の中には、月々僅かな費用で修業をしてる人が幾人もゐる、巴里の如き多くの費用を要する所へ来て、僅かな費用で、修業もし、参考品も買はふと云ふのだから、勢無理をして粗食をする粗食も静かな田舎とか海岸でもあればそんなに體にも障るまいが、巴里の様に自動車や馬車や、電車が引つ切りなしに通る、街を横切るのに前後左右に氣

をくばつて、馳せて通らねばならぬ様な所、色々なものゝ響きが、朝より夜、夜より朝迄、絶えず耳に響いて来る所。空氣が溷濁してゐて、重苦しく感ずる所。種々なる刺戟で、いつも氣がいら／＼してゐる所。こんな所にゐて粗食しながら勉強してた日には、到底體が堪えらるゝものではない。

これが病を引き起す一つの原因だ。も一つは夜深しと、女買ひとである、巴里では、何でもなく夜深しゝてしまふ程、誰にでも愉快に夜深し出来る様な設備？が備はつてゐる。一寸友達の處へ遊びに往つて、十一時頃になつて歸ると云へば、まだ宵の口じやないかも少し居ると屹度云ふ。

宵の口、成程茲では十一時頃は、まだ宵の口かも知れぬ。或るカッヘーなどは、十二時頃から人がぞろ／＼やつて來ると云ふし、或る寄席などは十二時頃に開くと云ふから。

夏の夜深しはまだしも、冬の凍る様に冷たい、茲の乾いた空氣——日本の濕氣を帯びる空氣とはまるで違ふ——それに曝さるゝのだから氣管を痛めることは知れ切つてる。最も健康な人は左程にも感じまいが、女買ひ、女買ひのことに就いては、自分はこゝに書くことを欲しない。唯それに連れて、煙草は吸ふ、酒は飲む、夜深しはする、だらしなき生活は續けらるゝ。これが第二の原因らしいことを單に記して置く。

七月廿二日

コラン先生



午後久米先生につれられて、S氏F氏及び佛人K氏と共に、コラン先生のアトリエを見舞つた。

自分が初めてコラン先生の繪を見たの

は、今より十年ばかり前、黒田先生の書室で、あつたと記憶してゐる。其繪はノルマンジの婦人と云ふ題で、鮮やかな緑を背景にして、白い手拭様のものを頭に被つた、若い女が縫物をしてる繪だつた。其後各種の小品及び、木に凭たれた白衣の婦人の大作を見るにつけて、先生の淡雅な趣味、秀美な線形、鮮麗な色彩に非常に興味を持つた。先生の繪にどこか意氣な處があるのも自分にはうれしかつた。そういふ繪を書く先生はどんな様子な人だらうかと、自動車の中で色々想像して見た。今日は朝から細かな雨が降つてゐる。車より降りて先生の家の門を這入ると、紅がら色に塗られた、アトリエの前にある石彫の虎が、雨にぬれて物憂げに頭を擡げてゐた。

久米先生が書室の戸をたゞくと、やがて繪筆とシャボンとを持つて、頭の毛の白い、鼻の大きい、大きな體格の人が出てこられて、久米先生と話してゐる。久米先生も随分大きい、其人は更に丈が高く、肉付きが立派